



園だより

.....17. 10月号

対話という方法で

幼稚園のモミの木の下の子イビーはもうそろそろ10月になろうというのに、若い緑色の葉が目立っています。幼稚園の裏の木蓮にも随分目立つ大きさで蕾がついています。私の家のムスカリは夏休みの間に葉を伸ばし始めてしまいました。「なんだかいつもと違うんだけど・・・。」と木々が草花が呟いているようです。

そんな不思議な秋の始まりですが、園庭にはいつものように白線が引かれ、ふくろう組はリレーの練習をはじめました。楽しそうに走っていた子どもたちの顔が、真剣な表情に変わりつつあります。5歳、6歳の子どものこんな表情に出会えるなんて、私たちは幸せです。そんなふくろう組で先日あった出来事です。

その日は引き渡し訓練の日でした。「せんせい、こんどはミサイルがとんできたときに、にげるれんしゅうもしないとだめだよ。」そう言われて、担任はすぐに返す言葉がなかったようです。その後、子どもは紙にくきたちょうせん、きらいくきたちょうせん、ばかく書いたそうです。それを見て担任はさらにショックを受けました。子どもには自分の思うことを話してみたが、ちゃんと伝わったろうかと心配になっている、そう言って保育後にこの出来事を私に話してくれました。私も衝撃を受けました。子どもたちがミサイルが飛んでくると口にする。<北朝鮮>という国を知らない年長の子どもたちが、理由もなく嫌悪する言葉を口にする。私たちの国の状況、大人の世界を子どもに隠すことは出来ません。そして大人の世界を鏡のように子どもたちは映し出すのです。悲しい気持ちになりました。そして、子どもたちに伝えるべきことを大人はいつも問われているのだと、強く思われました。

子どもたちには2月の創立記念日の前後にある礼拝で、必ず「愛隣幼稚園は戦争が嫌いです。」と伝えていきます。私たちは愛隣に繋がる子どもたちと大人たちに、伝えていきます。「自分を愛するように、あなたの隣人を愛しなさい。」それが「愛隣」です。それを当たり前のこととして、そして大事なこととして伝えていきます。たんぼ組は9月になってもまだまだトラブルは日常茶飯事。「とられたあ〜」「たたいたあ〜」「いたい〜」泣き声は毎日のように聞こえてきます。先生「どうして、取っちゃたの？」子「つかいたかったの。」先生「そう、そしたら黙って持っていけないで、お話してきたらよかったね。」先生「それから、叩いちゃうのもどうかなあ・・・痛かったみたいだよ。やっぱりお話した方がいいね。」私たちは言葉というコミュニケーションの道具を持っていて、これを使うと問題は平和的に解決することができる、子どもたちに伝えます。そして年長になる頃には、仲介者(先生)がいなくても解決できる子どもたちになります。“ミサイル”を飛ばさなくても“対話より圧力”なんて手段に訴えなくても、大人なんだから本当は平和的に解決できるはずですから、今起こっていることは、子どもに説明できません。また、愛隣の子供たちは、私たちひとり一人はみんな違っていると知っています。(知るようになります。)顔が違う、身体が違う、好きなことが違う、考えていることも違う。でも、私たちはひとり一人大切な仲間です。出会った当初、違いはトラブルの原因になります。しかし言葉を交わし、想像力を働かせ、互いをわかろうとするようになると、仲間の違いを受容できるようになります。自分の違いを尊重される(君は大事と言われる)と、自分も仲間を尊重できるようになるのです。そして本当に解決しなければならない問題が、どこにあるのか考えられるようになっていきます。私たちは皆、違うのです。それが大前提です。だから、相手を知ろうとする努力・対話を怠っては真の他者理解には至らない。相手の文化や歴史を知り、衝突の原因を明らかにし、互いを尊重しながら平和的な解決を目指したい。子どもたちには表面に見えている事実だけでなく、見えていない真実に目を向けられる大人になってほしいと願っています。「きらい」と思うその相手の真実の姿を知ろうとすることから、「平和」が始まる。「きらい」と書いたその国の多くの人々は困窮の中にいることを私たちは覚えていたいと思います。そしてひとたび戦争が起れば、何処の国であれ犠牲になるのは戦争を望まない市民であることも。私たち大人は子どもたちに、世界中の人々は仲間になることができると伝えていきたいのです。それが神様の望まれている世界です。